

術なき恋：「言はむ術せむ術知らに」

瀬古， 確

<https://doi.org/10.15017/12140>

出版情報：語文研究. 37, pp.1-6, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

術 な き 恋

—「言はむ術せむ術知らに」—

瀬 古 確

相聞歌と挽歌の間には人を恋うと言う点に於いて似通ったものがあり、互にチェーンによって結ばれている事は、既に私の指摘した通りであるが(註二)、ここに挙げた「術なきもの」として受け取る言い方も亦両者に共通して見られる所である。即ち

- (1)うち日さす宮に行く兒をまかなしみ留むれば苦し遣れば術なし(巻四・五三二、大伴宿奈麻呂)
- (2)我妹子に恋ひ術なかり胸を熱み朝戸を開くれば見ゆる霧かも(巻十二・三〇三四)
- (3)この頃は君を思ふと術もなき恋のみしつつかつ哭のみしそ泣く(巻十五・三七六八、狭野弟上娘字)
- (4)なかなか死なば安けむ君が眼を見ず久ならば術なかるべし(巻十七・三九三四、平群氏女郎)
- (5)白浪の寄そる浜辺に別れなばいと術なみ八度袖振る(巻二十・四三七九、常陸国足利郡上十太舍人部祿麻呂)

などの如く、相聞歌にあっては、特に好んで愛用せられてい

る。
(1)は宮仕えする女を妻に持つ夫がいつまでも手許に留めておくのは心苦しいし、そうかと言ってすぐ出仕させてしまう事もできない気持を「術なし」と歌っており、(2)は胸の痛いほどの恋の激しさを「術なかり」と言ったものであるが、作者の胸の鬱屈さは巧みに乳白色の朝霧によって象徴せられている。(3)は配所に下る夫君を思い、「術もなき恋」をし続けている作者弟上娘子のただ自らにできる事としては大声をあげて泣くだけである事を歌ったものであり、(4)は我が恋うる君、家持にいつまでも逢えないのなら、いっそ死んだ方がましであるとさえ言い放ったものである。更に(5)は防人の歌であるが、浜辺での別れに際して、「八度袖振る」事だけが彼に出来る最大限の表出であった。

恋人とか、夫とか妻とかと、共にありえない人々がどうしてよいかわからない自らの気持を現わすのに用いられるのが、「術なし」と言う言葉であった。

この恋しい人親しい人に、永遠に別れなければならぬ挽歌に於いても、当然相聞歌と同じく、「術なし」と言う言葉は、又好んで用いられているのである。

(6) (上略) 吾が恋ふる 千重の一重も 慰もる 情もありやと
吾妹子が 止まず出で見し 軽の市に 吾が立ち聞けば

玉禰 畝火の山に 鳴く鳥の 声も聞えず 玉禰の 道行く人も 一人だに 似てし行かねば 術をなみ 妹が名呼びて 袖を振りつる 或る本、名のみ聞きてあり (巻二・二〇七、妻死之後、柿本人麿)

(7) 君に恋ひいたも術なみ 蘆鶴の 哭のみし泣かゆ朝夕にして

(巻三・四五六、大納言大伴御養之時歌六首のうち。)

(8) (上略) 逆言の 狂言とかも 白妙の 舍人装束ひて 和豆

香山 御輿立たして ひさかたの 天知らしぬれ こいまろび ひづち泣けども せむ術も無し (巻三・四七五、安積皇子 薨之時大伴家持)

(9) 愛しきよしかくのみからに慕ひ来し妹が情の術もすべなさ

(巻五・七九六、日本挽歌の反歌の中)

(10) 現にと思ひてしかも夢のみに手本巻き寝と見るは術なし

(巻十九・四三三、悲傷死妻歌の反歌)

等がその例で、(6)は人麿が妻の死に際して、彼女のいつも行っていた軽の市に出で立って、彼女に似た声や姿を求めたけれども、一人として似た人はなかったので、その名を呼び袖を振っているのである。

恋しさの余り、名を呼ぶのは相聞歌にもよく見られる所であるが、名を呼ばれると、その人の魂は身体を離れて遊離してし

まうのである。当時の人々は魂が身体の中に収まっている間は健康であるが、遊離状態となると病気となり、それが永く続けば死を招来するものと考えていた。従ってその名を呼ぶ事は忌むべきものとせられたのである。袖を振るのも亦愛情表現の一つであった事は、旅行く人がよく峠で袖を振ったのによっても明らかであろう。

名を呼んだり、袖を振る事も屢々相聞歌に用いられているのによっても、相聞歌と挽歌との交流の一面を示しているものである。

生きた人に別れるのも、死んだ人に別れるのにも、全く同じ言動を行っている所にも、彼らの生と死とに対する考えが現わされているようである。即ち生と死との間にはただカーテンのような隔てがあるばかりで、自由に出入できるものと信じていたのである。

挽歌に於いて「雲隠る」とか「いでまし」とか「迷ふ」とかと、死者の積極的な行動として之を写しているのは、死者の再び現われる事、還御なさる事、迷子のようにいつか又出て来る事を希求する、彼らの切実な祈りの気持の顕現と言わずにはおられないのである。冷たい死の語を拒否して、敢えてその復活を思わせる語を選んでいる所にも、挽歌作者の温かい心遣が見られるのである(註二)。

之に反して相聞歌には好んで死を口にしてるのであるが、それは対手の心をこちらへ向けさせようとする一種のジェスチャーであり、実際の死を結果しない事は作者はもとより、相手もとくと承知の上の事である。死の語の拒絶と受容とをめぐっ

て、挽歌と相聞歌との間には著しい相異点も見られる事はもとよりである(註三)。

人麿がその妻の死に際して「妹が名」を呼ぶ事と、「袖を振る」事を二つ疊みかけて並べているのは、如何にその哀慕の情の痛切であったかを示すものとして注目せらるべきであらう。

(7)は大伴旅人の薨去の折の挽歌の中の一首であるが、卿を敬慕する人々の気持が、「哭のみし泣かゆ」との表現のうちに、よく現わされている。この「哭のみし泣かゆ」が(3)の狭野弟上娘子の歌にも「哭のみし泣く」とあるのによつても、相聞歌と挽歌との交流の一面を如実に示しているものである。

又(8)は大伴家持がその望を属した安積皇子が、若くして薨去せられた時の作であるが、その激しい悲歎の趣を、「こいまろび」と、「ひづち泣く」との二つを重ね合わせて示しているのであつて、ここにも相聞歌と相通するものを思わせずにはおかないものがある。

或は次の(9)は山上憶良作と言われる日本挽歌の反歌の一首であるが、「術もすべなき」と術を二度重ねて用いている所にも、長官大伴卿の立場からその妹への痛切な慕情を歌い上げたものである。更に(10)の作者は不明であるが、夢と現実とを対照させて、その空しさ儚さを強調したものである。

このように「術なし」は主として相聞歌と挽歌に好んで愛用せられたものであるが、その他の場合にも僅かではあるが用いられない事もないのである。

即ち一方では山上憶良によつて、貧窮問答の歌に、

(上略) いとのきて 短き物を 端截ると 云へるが如く
楚取る 里長が声は 寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯く

ばかり 術無きものか 世間の道(巻五・八九二)

の如く里長の極貧者への徴税の厳しさに對して、どうする事もできない「術なきもの」として受容せられているのである。折角貧窮を問題としながらも、当時であつては、独り憶良の力をもつてしたのでは、之を如何ともする事はできなかった。

そこに「術なきもの」とする憶良の深い歎きもあつたのである。

或は放逸した鷹を夢に見て作った大伴家持の歌にも

(上略) 招く縁の そこになければ 言ふ為方の たどきを

知らに 心には 火さへ燃えつつ 思ひ恋ひ 息衝きあま

り(下略、卷十七・四〇二)

の如くその鷹を招き寄せる方法とともないので、「心には火さへ燃え」「思ひ恋ひ息衝きあまり」と言った状態で、——それは全く相聞歌に於いて対手を恋しく思うのと同様であるが——術なき事を歎いているのである。此処には鷹の大黒は家持に取つては恋人と同じ取扱ひを受けているのである。

同じく家持によつて史生尾張小作を教諭する歌にも

(上略) 左夫流その兒に 紐の緒の いつがり合ひて 鳩鳥

の 二人雙び坐 奈良の海の 沖を深めて さどはせる

君が心の 為方もすべ無き(卷十八・四一〇六)

の如く歌われているけれども、尾張小作の遊行女婦左夫流を溺愛しているのに對して「為方もすべなき」と言い放つてゐるのであつて、教諭した歌とは言え、相聞の世界に主材を求めたも

のとも言えるであろう。

家持の作に共に相聞的色彩の多いのを見れば、「術なき」なる語を相聞歌とか、挽歌以外他の方面に用いたのは憶良だけとなるようである。所が同じ大宰府にあって、彼とその歌を競い合った長官旅人にも、「言はむ為方せむ為方知らず」を用いた讃酒歌のあるのも不思議である。即ち

言はむ為方せむ為方知らず極りて貴きものは酒にしあるら
し(巻三・三四一)

なる一首であるが、この讃酒歌十三首には前後に脈絡の糸が細かに張り廻らされており、この歌に見える「貴きもの」も、後の「価なき宝」(三四五)とか、「夜光る玉」(三四六)へと続いて行っており、作者の連作の妙味を偲ばずにはおられないのである(註四)。

一方に憶良が貧窮と言った彼一人の力では到底如何ともする事の出来ない社会問題に取り組み、他方旅人は酒を讃めるに当って、「極りて貴きもの」としながら、共にそこに「すべなし」なる語を用いているのに注目せずにはおられないのである。

憶良が貧窮を取扱って「術無きもの」として之を受け止めているのは如何にもリアストらしく、又旅人が如何にも明るく——とは言っても、私はその裏に亡妻を懐く旅人の深い悲しみの秘められているのを思わずにはおられないのだが——酒を讃めるのに際して、「極りて貴きもの」と言っただばかりでなく、「言はむ為便せむ為便知らず」との修飾を上置いていっているのは、彼のロマンチストらしい面目を示しているものと言うべき

である。

憶良と旅人とは如何にもその人物を浮彫にするかのような「すべなき」の用い方をしてるのであるが、この二人を除けば、「すべなき」とか「言はむすべせむすべ知らず」とかは殆ど相聞歌と挽歌の世界に好んで用いられている——家持に多少俾をはみ出した作があるが——と言えるであろう。

二

次に相聞歌に於いて「為方なみ」はどんな場合に用いられているかを考えてみたい。

相思う二人が自由に逢う事が出来れば勿論「為方なみ」と言う状態にはならない筈である。招婿婚の当時としては、男は女の許を訪ねねばならず、女は男の訪れを待っていなければならぬ。従って種々の障害があつて思うように逢えないのが普通である。まして片思いの場合には一層相見する事の難しいのもよりである。

しかし相寄る魂は互に逢わずにはおられない。

妹に逢はずあれば為方無み石根踏む生駒の山を越えてそ吾
が来る(巻十五・二五九〇、遺新羅集)

の如く難波から生駒の山越の険しい道をも厭わず大和の家へと帰って来るのも「逢はず」にはおられないためであり、「妹が目を欲り」(三五八七)とすぐ前の歌にも詠まれている通りである。或は平群女郎の越中守大伴家持に贈った歌の中に

なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならば為方なかる

べし(巻十七・三九三四)

なる一首があるが、「君が目を見ず久ならば」かえって死を選んだ方がましである——相聞歌に死の語を好んで用いるのは、对手的心をこちらへ向けようとする修辞技巧であつて、死の語を敢えてした所で、決して死を招来しない事は作者はもとより、相手もとくと承知の上である(註五)——とさえ言っているのである。

或は家持の恋緒を述ぶる歌にも

(上略)あらたまの年行き返り 春花の 移ろふまでに

相見ねば 甚も為方なみ 敷袴の 袖反しつ つ 寝る夜落

ちず 夢には見れど 現にし 直にあらねば 恋しけく

千重に積りぬ(下略卷十七・三九七八)

の如く歌われており、「相見」ぬ事が久しくなれば袖を反して寝ては毎夜夢では思うその人に逢えるのだけれども、「直にあらねば」とその恋しさを一入と募らせている。逢えない時は夢にでもと「袖反しつ つ」その効果を期待するのだが、願いのままに夢に見る事は出来ても、それは現の事とは言えず、「直の逢ひ」(卷二・三二五)——これは挽歌の例だけれども——のようにには到底満足する事の出来ないのが万葉人の常であつた。相見の事の出来ない場合は「夢の逢ひ」でもと願う人も、夢に見る事が出来れば、更に又直接に相見の事を希望するのは人情である。このように相見の事の出来ない人の心を満たすのには「相見る」より他に方法はないのである。

従つて彼らの最大の悲しみは愛する人と別れる事であつた。

吾が背子にまたは逢はじかと思へばか今朝の別の為便なかりつる(卷四・五四〇、高田女王)

月日おき逢ひてしあれば別れまく惜しかる君は明日さへもがも(卷十・二〇六六)

あまざかる鄙にも月は照れれども妹を遠くは別れ来にける

(卷十五・三六九八、道新羅使)

妹が袖別れし日より白妙の衣片敷き恋ひつ つそ寝る(卷十一・二六〇八)

二六〇八)

かくしつ つあり慰めて玉の緒の絶えて別れば為便なかるべ

し(卷十一・二八二六)

などはその例であるが、屢々「為便なし」と結合して用いられている所にも、別れの悲しみの如何に激しかったかを示している。

かくて常に二人共にいる事の出来にくい彼らは兎角物を思い恋ひ続けねばならないのであり、

君に恋ひいたも為便なみ檜山の小松が下に立敷くかも(卷四・五九三、笠女郎)

念ふにし余りにしかば為便を無み吾は言ひてき忌むべきもの

(卷十二・二九四七)

我妹子に恋ひて為便無み夢見むとわれは思へど寝ねらえなくに(卷十一・二四二二)

玉椀 懸けぬ時無く わが思ふ 妹にし逢はねば あかね

さす 晝はしみにらに ぬばたまの 夜はずがらに 眠も寝

ずに 妹に恋ふるに 生ける為便なし(卷十三・三三九七)

この頃は君を思ふと為便もなき恋のみしつ つ哭のみしそ泣

く(卷十五・三七六八、狭野弟上娘)

などの如く男も女も思い余つては歎いたり、声を立てて泣いた

り、「忌むべきもの」とされてゐる恋人の名さえも口に出さずにはおられないのである。

又霍公鳥のかしましさは彼らの恋心を一層かき立てるものとして

霍公鳥間しましおけ汝が鳴けばあが思ふ心いたも為便なし

(巻十五・三七八五)

と中臣宅守よつて歌われているのをはじめ

物思ふと寝ねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡る為便なきまでに

(巻十・一九六〇)

とも歌われている。

或は二人の間を繋ぐ役目をするものは間使であるが、

誰そ彼と問はば答へむ為便をなみ君が使をかへしつるかも

(巻十一・二五四五)

なる歌のように、その人からの使と判つていながら、人に聞きとがめられた時の返答に困つて、折角の使をもそのまま帰して

しまわねばならない事もある。

或は思ひ余つては

玉捧 懸けぬ時なく 吾が念へる 君に依りては 倭文幣
を手に取持ちて 竹珠を 繁に貫垂れ 天地の 神をそ

吾が祈む 痛も為便無み(巻十三・三二八六)

の如く神にも祈願を捧げずにはおられないのである。

相思う人々に取つて兎角恋は「すべなき」ものであつた事は

万葉の時代とても変りはないのである。

註一 拙著「万葉集の表現」所収「雑歌・相聞歌・挽歌の交流」を参照。

註二 拙著「万葉集に於ける表現の研究」所収「挽歌の表現」を参照。

註三 同書所収「相聞歌の表現」並に「挽歌の表現」等を参照。

註四 同書所収「短歌の連作に就いて」を参照。

註五 同書所収「相聞歌の表現」を参照。